

ハマトビウオの回遊経路が見えてきた？

東京都では、2001年からTACを設定して、漁獲制限を行っています。しかし、我が国の太平洋沿岸を大回遊すると思われるハマトビウオの生態については謎が多く、現在も生態研究を継続しています。今回、八丈島～青ヶ島海域で大量の標識放流を実施したところ、3尾の再捕報告があり、このうち1尾が放流後1年9ヶ月を経て屋久島で再捕されました。

実施機関	八丈分場	事業名	特定重要資源の生物学的特性値の把握
------	------	-----	-------------------

背景・ねらい

東京都では一時は漁獲量がゼロに近くなった(図1)ハマトビウオの資源回復を図るため、2000年より「年間目標漁獲数量」(TAC)を設定して、漁獲量の制限を行っています。しかし、その資源生態のすべてが解明されているわけではなく、未だ明らかでない移動生態を解明するために標識放流などの調査を実施し、資源推定の精度向上を目指しています。

成果の内容・特徴

2001～2002年のハマトビウオ漁期中に調査指導船「たくなん」により八丈島～青ヶ島海域で、計1334尾の標識放流を実施しました(表1)。

2003年2月までに、3尾の標識魚が再捕されました。

- ・再捕記録1) 2001年4月27日に青ヶ島で放流したものが335日後に八丈島周辺で再捕されました(図2)。
- ・再捕記録2) 2002年4月10日に青ヶ島で放流したものが19日後に三宅島・三本岳付近で再捕されました(図3)。
- ・再捕記録3) 2001年4月17日に八丈島中之郷沖で放流したものが1年9ヶ月後に鹿児島県屋久島安房港沖で再捕されました(図4)。

再捕記録3)から伊豆諸島産卵群と薩南産卵群のハマトビウオの一部に交流があり、また1年魚と言われるハマトビウオのなかにも3年近く生きるものがあることが確認されました。

成果の活用と反映

今回の調査結果により、年齢と寿命、さらに伊豆諸島産卵群と薩南産卵群の交流について検討が必要となり、これらの生物学的特性値を解明・把握し、適正な漁獲数量管理を行う上で重要な資源量推定の精度向上を図って行きます。

(橋本 浩)

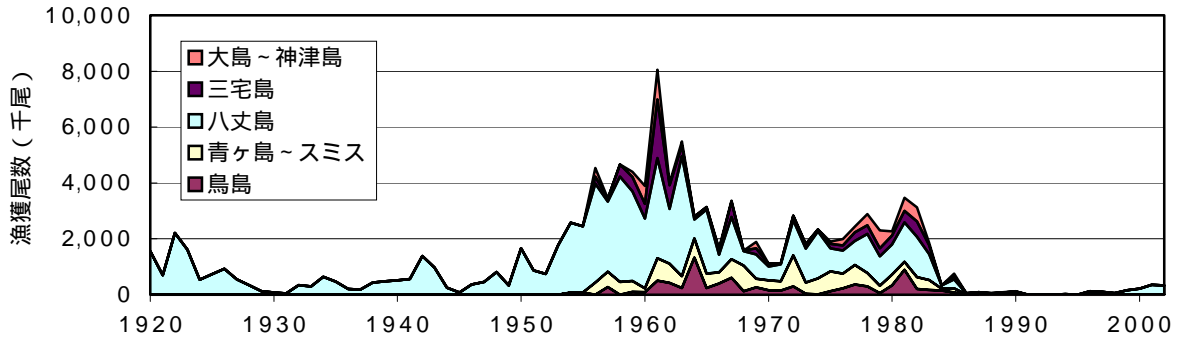


図1 ハマトビウオ漁獲量の推移



図2 再捕記録1) (移動経路は不明)

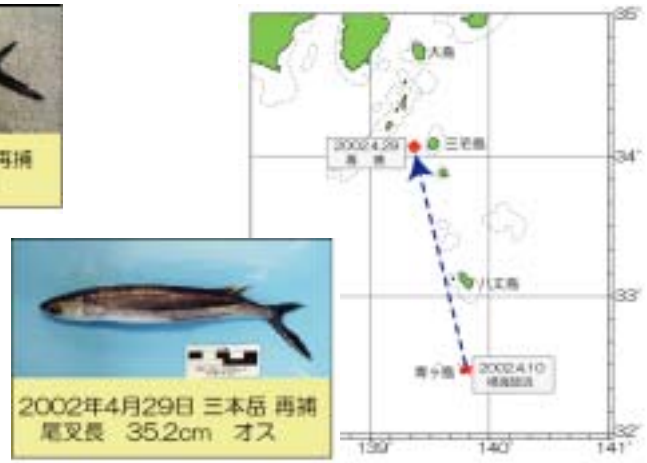


図3 再捕記録2) (移動経路は不明)

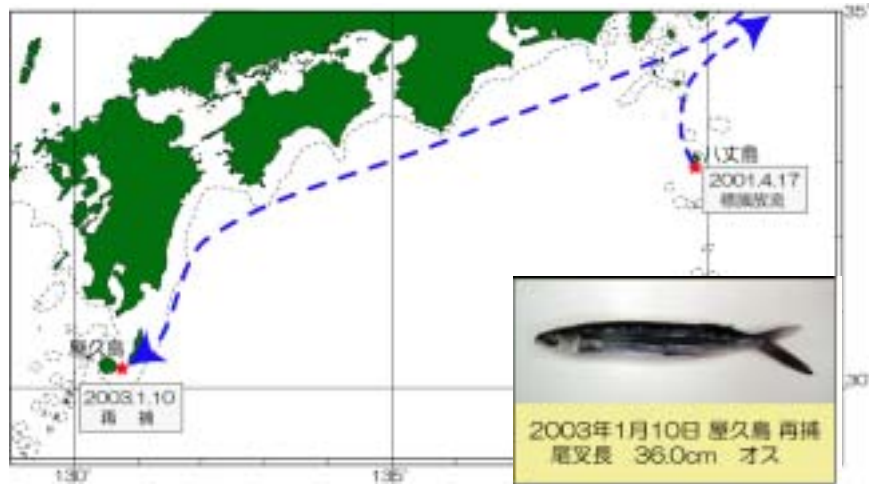


図4 再捕記録3) (移動経路は不明)

表1 標識放流 再捕記録

標識放流記録				再捕記録		
放流月日	放流場所	標識種類	放流尾数	再捕年月日	再捕場所	標識No. 経過日数
4月17日	青ヶ島南東沖	スパゲティタグ(黄,緑)	283尾			
2001年 4月17日	八丈島中之郷沖	スパゲティタグ(緑)	339	2003年 1月10日	屋久島安房港沖	TK 302 634日
4月27日	青ヶ島南東沖	アンカータグ(白)	475	2002年 3月28日	八丈島周辺	カバ-なし 336日
2002年 3月25日	青ヶ島南東沖	スパゲティタグ(黄)	48			
4月10日	青ヶ島南東沖	スパゲティタグ(黄)	189	2002年 4月29日	三本岳周辺	TK-H 184 19日